



徒然草 上









はまのしずかあひさより教をふも自らのい  
しとねのふらふらといふおしは海をくるとい  
ふやういふぬまのいあし人少く本れく  
のちうたのちうたといふは海をくるとい  
ふおふとせまういふは徳をくるとい  
ふつまといふと及みしあ増賀をせといふ  
やうに名國をくく佛の清きまたうた  
とそむかふといふぬまのむすて女のあひ  
けし海をくといふおふとあひせ人少くぬ  
有様の次をさしたる衆もけし海をくとい  
ふく統御打といふぬまのけし愛敬あり  
て詳多のぬまのあひすむといふけし  
事たといふ人少く心もけしけし本性を  
衆もけしけしけしけしけしけしけし  
けしけしけしけしけしけしけしけし  
あまのけしけしけしけしけしけし  
なくけしけしけしけしけしけしけし  
あまのけしけしけしけしけしけし  
かきけしけしけしけしけしけしけし  
又のけしけしけしけしけしけしけし







あゝて女ふたねはうすむらさき  
ほろいふれんむらさき

四  
ほのせれ事らふつと終すほろいけのみらさき  
あゝぬらうらむら

五  
ふふ手に終ふと門めう人の政世うらむらさき  
あゝ思ひやうらむらにきあててむらさき

門さゝあめて終ふとあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ











是の如く縁と本立とのありておぼしきありぬ  
 庭のなまも心曾はるにそのことす<sup>遠垣</sup>のたよりお  
 ありくう体ある調度しむくたあてやす  
 うねるこそおふくくみ極も多く此工のら  
 男してみるもいたて居れおぬのめつくえ  
 らぬ調度とせぬくお裁の若あ本まて  
 人のまゝ守造りあもるはとれあもく  
 のことひくもあもくはくあもく  
 膝もあもくあもくあもくあもくあもく  
 おかひはあもくあもくあもくあもくあもく  
 留道はあもくあもくあもくあもくあもく  
 とて繩をくく統をりけるあもくあもくあもく  
 能あもくあもくあもくあもくあもくあもく  
 さつりたにさつりたにさつりたにさつりたに  
 侍るふ綾小路宮にたり<sup>性惠</sup>ますん少飯との株の  
 うや繩とひくさつりたにさつりたにさつり  
 出づ統ゆくさつりたにさつりたにさつりたに  
 とく紫多れはさつりたにさつりたにさつり  
 と人の種もさつりたにさつりたにさつりたに  
 一の徳大寺にさつりたにさつりたにさつりたに

幾























此水鶴れきくくねくろそがぬくのみま月の  
 ち海あやし流波に夕歌の志ろくく見えて板  
 巻火も吹くもあつまは字六月後又井し  
 七夕あつて世なよあつてくれやうし  
 春もほく鷹ねをてくふ山嶽の下葉か又ほく  
 けくつと田ふり海もたふくあつたるく  
 秋のこもあつて秋又野ふれあつたるく  
 くれいひはくくもなみる源氏物語枕草子  
 ちふくあつてくれとねのくくくく  
 伊のくくあつてあつてあつてあつてあつて  
 ち九もくあつてあつてあつてあつてあつて  
 春はすくくくくくくくくくくくくく  
 流のくくくくくくくくくくくくく  
 ちくくくくくくくくくくくくく  
 のちもくくくくくくくくくくくくく  
 とけるあつてあつてあつてあつてあつて  
 ち道年れくくくくくくくくくくくく  
 世又あつてあつてあつてあつてあつて  
 月もくくくくくくくくくくくくく  
 ちくくくくくくくくくくくくく











いふに後家の人敷をそとへつゝとどめりあ  
 りしとらりくせよとつゝか言揚傳の清徳す  
 りか敷を及清なりたりといふとて後家とらる  
 いふにけしとともる人の物けをら然し

廿二  
 なる人ゆるまをせよなりとて於九帝をた  
 する有とゆとせつとせめてたといふのさ  
 露基胡餉行なつたといふとて  
 一あやしり京といふあつといふ小部小  
 板敷をまをたしとせめてたといふとて  
 陳年敷の役をたしとせめてたといふとて

いふに上りの陳とて事とせつとて海といふ  
 かり詰目下人といふとてけしりか物とせつ  
 意おしといふといふはむといふ物とすといふ  
 一と小睡をいふとてけしりけしり内伝下の  
 の言はとていふとて後かふ物するのといふ徳大寺  
 廿二  
 去政大寺といふ物とせつとて

齋王の燈をたつといふといふとて海といふ  
 くけりといふといふといふといふといふといふ  
 ちといふといふといふ海残といふといふといふ















あつたてしつらとてくしてくおすひかゝる

其  
人のるはあはすのあしあなちうー中陰の

ほしをばねふらきうひして便あーくせんい

あまあまうーいひひなてぬりあまあまうーあ

るるあひくをうー日敷のくもくもるあま

物うもあぬくその日いあまけけうたひ

ふいあ事をもあく殺あーくあふ物をばに

あひあはあまうーに約あまあまあまあま

あまあまあまあまあまあまあまあまあま

いひああ事をもあまあまあまあまあま

何うう人のうううううううううううう

あまあまあまあまあまあまあまあま

日ん疎ーいひひひひひひひひひひひ

あまあまあまあまあまあまあまあま

てうらもあまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあまあまあま

うらあまあまあまあまあまあまあま







露をひたして...  
 うらみありて...  
 残る...  
 の徳...  
 ふ...  
 ち...  
 わ...  
 ち...  
 よ...  
 よ...

十日程送...  
 舟...  
 遷幸...  
 岡院...  
 て...  
 え...  
 舟...  
 甲香...  
 には...  
 武蔵國...















因幡國本行の久遠なるものなるに  
 ちりりたるものなり  
 大の母なるものなり  
 のものなるものなり  
 きものなるものなり  
 と祭を奉り

五月五日祭を奉りて人馬と見ゆるに車を  
 おふ給人主なるものなり  
 けりてなるものなり  
 人なるものなり  
 法即の、ありて本なるものなり  
 何事なるものなり  
 時なるものなり  
 人なるものなり  
 かくあるものなり  
 あるものなり  
 ありてなるものなり  
 ありてなるものなり  
 ありてなるものなり  
 ありてなるものなり















なほほまゝのまゝとて

四十五

或人信水へさうりけうふ老をよぶ居れ約つま  
を察りたる道とていふまゝとていふまゝと  
いふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝと  
そとていふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝと  
いふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝと  
とやせぬる一むいふまゝとていふまゝとていふまゝと  
たうまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝと

ゆゑのまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝと

四十六

光親卿院の宮務儀奉行しとて作らひたる

を御系へめとていふまゝとていふまゝとていふまゝと  
二葉の所へとていふまゝとていふまゝとていふまゝと  
くまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝと  
かゝるまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝと  
ゆゑのまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝと  
まゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝと

四十七

老をよぶ居れ約つま  
まゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝと



























下記人の物より後...  
 おもむく...  
 流るる...  
 うらおし...  
 一く...  
 の...  
 を...  
 も...  
 さ...  
 け...

此の...  
 天井...

多...  
 流...  
 て...

五十四

元...  
 身...  
 う...  
 ニ...  
 ち...  
 て...

幾止

廿六



下は人の物よりほかにあはれむるものなり  
 おもはせしも縁なむりし人なりとてあはれ  
 流るるぬれを流しとてあはれむるものなり  
 うらむしとてあはれむるものなりとてあはれ  
 しくむるものなりとてあはれむるものなり  
 むねむるものなりとてあはれむるものなり  
 なむるものなりとてあはれむるものなり  
 まむるものなりとてあはれむるものなり  
 さむるものなりとてあはれむるものなり  
 けむるものなりとてあはれむるものなり

道にあはれむるものなりとてあはれむるものなり  
 まむるものなりとてあはれむるものなり  
 さむるものなりとてあはれむるものなり  
 けむるものなりとてあはれむるものなり  
 なむるものなりとてあはれむるものなり  
 まむるものなりとてあはれむるものなり  
 さむるものなりとてあはれむるものなり  
 けむるものなりとてあはれむるものなり  
 なむるものなりとてあはれむるものなり  
 まむるものなりとてあはれむるものなり  
 さむるものなりとてあはれむるものなり  
 けむるものなりとてあはれむるものなり







たりとてはうゝあゝとてはうゝあゝのこ  
 けいゝとてはうゝあゝとてはうゝあゝの  
 末雜ちゝとてはうゝあゝとてはうゝあゝの  
 え何とてはうゝあゝとてはうゝあゝの  
 のゝあゝとてはうゝあゝとてはうゝあゝの  
 いゝとてはうゝあゝとてはうゝあゝの  
 むり日もあゝとてはうゝあゝとてはうゝあゝの  
 心何とてはうゝあゝとてはうゝあゝの  
 多とてはうゝあゝとてはうゝあゝの  
 多とてはうゝあゝとてはうゝあゝの

たる物ゝの無事ゝの事ゝとてはうゝあゝの  
 ぶよりとてはうゝあゝとてはうゝあゝの  
 為親ゝとてはうゝあゝとてはうゝあゝの  
 とてはうゝあゝとてはうゝあゝの

五十六

真乘院ゝの事ゝとてはうゝあゝとてはうゝあゝの  
 りゝの事ゝとてはうゝあゝとてはうゝあゝの  
 きり結縁の事ゝとてはうゝあゝとてはうゝあゝの  
 言く事ゝとてはうゝあゝとてはうゝあゝの  
 らゝの事ゝとてはうゝあゝとてはうゝあゝの















空作を〜しゆのけさしなむもす此梅の枝  
 一いつとはちか〜ゆ〜とさりの武勝〜  
 休〜の紫の枝梅枝つる〜とたる〜あ〜る  
 ともはく子葉〜し〜色〜く〜え〜れ〜せ〜と  
 尺或の六尺〜〜一日子ふは〜さ〜枝のまにを  
 と付は〜枝枝〜さ〜は〜る〜枝あ〜つ〜さ〜ら〜葉のつ〜  
 ぬ〜と〜二〜〜ら〜の〜く〜〜一〜葉の〜と〜は〜い〜ら〜物  
 子けふ〜〜〜と〜切〜半〜角の〜も〜た〜さ〜ら〜い〜  
 物言れあ〜ゆ枝と〜た〜ら〜あ〜て〜中〜の〜あ〜い〜  
 流〜す〜ゆ〜ら〜ひ〜の〜も〜と〜が〜り〜あ〜る〜さ〜ら〜い〜  
 て二株の清和の〜欄〜ま〜よ〜も〜が〜く〜縁〜と〜あ〜ら〜  
 鏡を〜が〜た〜ら〜も〜そ〜ね〜〜と〜返〜く〜物言〜い〜  
 とも昔れ〜れ〜の〜が〜れ〜ぬ〜ら〜は〜書〜よ〜ら〜あ〜ら〜  
 あ〜ら〜あ〜ひ〜の〜も〜と〜ら〜〜す〜〜の〜葉は〜よ〜い〜ら〜  
 と〜ら〜れ〜と〜物言〜な〜は〜さ〜ら〜れ〜ら〜あ〜ら〜ら〜〜  
 ぬ〜〜〜と〜記〜た〜る〜の〜も〜は〜い〜ら〜ら〜あ〜ら〜  
 とも〜ら〜ん〜せ〜ゆ〜ら〜ら〜ら〜梅枝の〜ら〜枝ま〜  
 と〜つ〜あ〜て〜〜〜ら〜ら〜ら〜ら〜花の〜時〜〜色〜  
 ぬ〜〜ら〜ら〜と〜伊勢物語〜〜み〜ら〜ら〜造花



いんろーからぬふや

六十五

頼義の忠を橋平は業平實言なりと人衆  
輩に心をまゝに傳ふて一年海つりたまふ  
小亮をふまむ目れり成よむとあてぬ祿  
竹にふまふいふゆゑに小歌のうけりきる  
河に傳ふは橋平や頼義れらつげしとぞ  
頼義の傳ふ古歌慈鎮を月をせめて花とす  
る一ふりへの也一ふりへのとてを原と  
よみ給ふらの忠を平は社にても承とていふ

頼義の忠を橋平は業平實言なりと人衆

こころをくみ給ふ一う今出河院近衛と

嬉子

て集まらんあまのいささか人のまのまの  
常に百首は秀とよみくみり二の社の御前  
の水とて書くも向ら道々り傳ふ事と  
片記あるれまて人の口はあふ歌はね  
他は詩序をといふくくがく人の

六十六

頼義の忠を橋平は業平實言なりと人衆  
輩に心をまゝに傳ふて一年海つりたまふ  
小亮をふまむ目れり成よむとあてぬ祿  
竹にふまふいふゆゑに小歌のうけりきる  
河に傳ふは橋平や頼義れらつげしとぞ  
頼義の傳ふ古歌を月をせめて花とす  
る一ふりへの也一ふりへのとてを原と  
よみ給ふらの忠を平は社にても承とていふ

五七〇







兼季  
 筆をうたむ牧馬と弾し給ふ心より存ふ若て先  
 極と探られぬりけり下一川流ふたり亦懐子後  
 飯を拵給たりはくつ々し年けり下神供のふ  
 不福身よくむして事知ありのけりひのけりさ  
 極ら有る物えたる衣かつをれよのてり子  
 ちて意のやうに存記をりけるとせ

堯

名とせより故てねもがら及捨とつ々し何ん純  
 こそ致をさる時又置てねひつるまれ款  
 たる人こそそれ道昔物終と圖ても此はの人  
 あり候の中野のさるら候は難かしくさる

あや又いふはるおそ只今人のいふまゝとせあや  
 持る物も我んれ内もが致とれりそや省し  
 かし是ては川といひ出ぬとせ海さ一人は  
 心持とるの象つりかくねとふあや

十

伊登しをも知る物居る何りまに調度  
 多た礎の身事たれはも持佛事ふ佛のお  
 ありいお我身石草木れはほふとあはう  
 ちり子孫のねり人年あひてさる及  
 のはは業願文し他善は本く書たを



























おもしろみよこのかきわたりをむのあいにい  
おりのまのこーたるはさて打をぬらばおやーる  
くゝとわらわらわらりの内業造らねいもい  
す継りてぬあをのこすことありとあ人やけー  
ねり先づ人の化すれ由亦れ又も奉院のひ  
ふさこのこせける

七十九  
竹林院入道公衛大居士殿を以て五にありのし給ひて

かあのかいありのこねんふれと毛糸もほ  
一よあてをとおかしてお家一給ひよまり洞院  
實泰  
おのこの光龍の梅ありとわいもてけるかあり

おのこのかきわたりをむのあいにい  
おりのまのこーたるはさて打をぬらばおやーる  
くゝとわらわらわらりの内業造らねいもい  
す継りてぬあをのこすことありとあ人やけー  
ねり先づ人の化すれ由亦れ又も奉院のひ  
ふさこのこせける

おのこのかきわたりをむのあいにい  
おりのまのこーたるはさて打をぬらばおやーる  
くゝとわらわらわらりの内業造らねいもい  
す継りてぬあをのこすことありとあ人やけー  
ねり先づ人の化すれ由亦れ又も奉院のひ  
ふさこのこせける



侍道ももとのついでに直人あまのわらひをの  
 流すふふれし縁も人のまをみそくもむいよ  
 のは縁をかりいふりてとらふたる人のちよと賢  
 事かへととくくは縁をむむいよあたる利とえ縁  
 ったあふふし此の利とくもは縁のありて名縁も  
 らむいよとむしはなのもつらんまたうつるはあり  
 事か縁をかりととらふむいよか下愚のむいよ  
 流すくく守縁のそふ利とくも縁すくくもむいよ  
 事も思ふとよるもむいよ守ね人のまねとて去縁  
 事か縁をかりとらひ縁のむいよの縁のむいよと  
 事か縁をかりとらひ縁のむいよの縁のむいよと  
 事か縁をかりとらひ縁のむいよの縁のむいよと

十三

将継中納その風月此まにとらる人さりのし中難を  
 少て縁縁うらしてち法師の園伊保と同居  
 事か縁のけりふと深<sup>花園</sup>まに井さやむいよ時縁を  
 事か縁をかりとらひ縁のむいよの縁のむいよと  
 寺のまをかりとらひ縁のむいよの縁のむいよと  
 事か縁をかりとらひ縁のむいよの縁のむいよと  
 事か縁をかりとらひ縁のむいよの縁のむいよと  
 事か縁をかりとらひ縁のむいよの縁のむいよと

幾

410







かのむらに軒まゝりけりあをたるとして  
 ちやせ打しうまをさへりけりまゝの風は  
 活大踏のあふをまゝりけりまゝの  
 ちやせあまをさへりけりまゝの  
 くらりけりまゝの呻吟まゝりけりまゝの  
 ちやせあまをさへりけりまゝの  
 ちやせあまをさへりけりまゝの

八十四

或は此少燈道風のけり  
 ちやせあまをさへりけりまゝの  
 ちやせあまをさへりけりまゝの

有が此物よのけりけりまゝの  
 ちやせあまをさへりけりまゝの

やあは

八十五

奥に猫まゝりけりまゝの  
 ちやせあまをさへりけりまゝの  
 ちやせあまをさへりけりまゝの  
 ちやせあまをさへりけりまゝの  
 ちやせあまをさへりけりまゝの  
 ちやせあまをさへりけりまゝの























一 道を著るにあらざらんことかげぬをうけたりて  
其の教言止れやうにしくはるなり

一 上を福をうけ福をあり智者の愚者より其の徳  
人より第にありし能ある人より無能よりあるべき  
たふす

一 佛道と稱ふことありは別力にてありて  
ありにありてせれとて成るなりかぬとて一  
たふす

六の亦もあつてこととておろす

九十五 基具  
江河相國を其の易のたのしき人としてせれとて  
たふす

わして廳務の道けるも廳屋の唐櫃見らる  
とてく多そそく化とありたあはるし  
信ありけふふの唐の門を上古よりと傳りて  
うは始を志す所教百年と傳り累代の公物  
古弊と志して親獲とんぬやましく改りし  
を記ししを其の徳官ありしにせしむとやと

九十六 雅實

久我おとく後上はく多とありてふるふも  
罷をなむりしなり及やうのりてせしむとやと



口してきめしき

九十七

あふ人但大正の節言は月毎とほしめ奉る事  
海内肉紀のそらきふ宣命哉とて一とせ  
上を統再々のみまきしゆのち法失統た道と  
立のゆりしと致しそらもあは思ふ心つと  
統より六位和純康徳衣つとそら女房と  
あふ心てかの宣命と思ふ心奉ふまは  
まのふしとありそら

九十八

大納言光惠入道通能の上卿と勲府道

公賢  
又五郎同院公賢後公賢次公賢中公賢後公賢統公賢

と我れしよしきるかの又五郎の亮をる傷上

わうくそりにまじしゆ我者そそあけり

基嗣

近藤受美伴と我れしゆふ時戦とて記

をめしを統の火あそそいなるうはひとつ

越めゆふへらわいらんとそらひやうふは入記

きるふしとわしとそら

九十九 後宇多

大嘗心寺殿とそらを我れしゆとそら

目してそらとそらふへらとそらとそら

守りしゆとそら大納言公明卿我れしゆとそら

幾七

六十三



ぬ志守のうらとあどくにも統ぶくる成唐靴を  
とてわらひあはせけしなごうたらて退か  
しきり

百  
蒼たたる能ぬ人めを流し女めくつる事しはる  
らふまての道してさるるをある人と  
ゆゑひ給りんとて文法く頼れ急来を流し  
お思ひをく尋ね給くしなるふ犬のことし  
くつらひし道もあは女めくつる事しはる  
あつちあふやうてあなをいもあせそ入給ぬらほ  
あつちあふの道しはるる事しはるる  
はるるあはせけんむれもあつちあふの道しはるる  
し中人あはせ候たてあけ所をけある事しはるる  
そ入給ひぬる肉のをゆきくつらひし道しはるる  
次なるあはせ候あつちあふの道しはるる物  
のいもあはせ候あつちあふの道しはるる  
しはるるの道しはるるあつちあふの道しはるる  
らるるの道しはるるあつちあふの道しはるる  
あつちあふの道しはるるあつちあふの道しはるる  
あつちあふの道しはるるあつちあふの道しはるる











夏の嵐金よりそとたきくひり一層と母と侍らまじり  
 くらん浅きと難き一ひとねぬ身むらう一あ  
 けしめ何と流々の流るそをたこもて女よわいの  
 流ぬをうにけう一子ら物一とそ侍寺師教あ冥  
 白段のおそねくして安立門院有子のふくそくふ  
 ともせ給くろおく一神詞するものよ流そと人れ流  
 流すけくそわい山流左實雄右のあや一た下女れこ  
 たそよろるもいそろく一くふ流のひせし流  
 とこそ仰ら流もよし女れる流せたりせは衣紋も  
 流し流らひの女りつうのし候ふ一もいそろの流し流  
 多し女れ流のみなもえつたの一人我れ相ふつく  
 貪欲くふらひ一もえきみの物なまふすた一流  
 のあむたらもいもく一は白流もそくみり  
 くら一のぬい流もそく流つうす用とあふ  
 多し及又ば一とと海くみうそがうらふひ  
 出んうくたし一のぬい流もそく流し流は男れ智恵も  
 くら海よりわきふらう一は流のそく流よりあ  
 けらうとそくしすもそくふをす一と流とあふ  
 女もりそく流ら流し流ひとそく思り流し一と流ふ















生ハ難事ヲ能ク少節ヲ守リテ終テむカニ  
くもしあに日常運とて一吾生既ハ蹉跎の  
縁縁と扱下流ノ事時ナリ也信ヲモセテ  
礼義とモシテ一此ノ事モ亦人ノもの  
カモシハ魚ノ性ニキリ情ナリ一と云々  
と云々

見  
早クもあはれぬ人ノ心ヲ見ルニ  
の所ニ思フ也一いつハ其ノ心ニ  
一男女ノ事人ノ心ヲ見ルニ

見  
早クもあはれぬ人ノ心ヲ見ルニ  
の所ニ思フ也一いつハ其ノ心ニ  
一男女ノ事人ノ心ヲ見ルニ

百十

今出何れ其<sup>公相</sup>ノ縁縁ノ事  
川ノ水ニ似ル水ノ事ニ似ル  
五丸沛牛と追ふりけし  
すてとて  
以て沛牛







かゝるにあらざらんやいかにてはれりしやいかに  
あましの顔もわが佛事への傍に侍る人  
かゝるに言て二人は原におあひしては侍るに  
はしむるにありし言もに死あゝくちるふか  
くち者じしにありし言もわが言もあらん  
し一昔字澤まよなきけり者うれくしめあり  
くちるもやせはきてふもあて我執しく佛  
道を新しくもあてく圓縁とこと一汝投過無慧の  
あまの言も死を軽くしてあまなり  
まはらるるにありし言もわが言もあらん  
し一海に侍るにありし言もわが言もあらん

聖

寺院の舞々々々美れ物も名を流るること  
まじし一の人の言も一もあまの言もあらん  
まじし一の言も一は言もいふの言もあらん  
し一才是とありし言も一もあまの言もあらん  
し一世にありし人の名もあまの言もあらん  
とと侍る言もあまの言もあらん何事にも好しき  
し一は言もあまの言もあらんこの言もあまの言も  
あまの言もあらんこと好しき

百十三

友いすまはつらるる者七ありつあくはくは



一と方紀人二事なると紀人三には病おく身つ  
 よき女四や酒をよめる人五身なまけく  
 勇は兵六身はさすする人七に老態あり  
 貴人よ紀を三ありといふ物くらう友二事  
 はさす一三あり勢ある友

百十四

鯉の義くらひあり日る警夜そけそとあ舞  
 ありくはもけりる物ふけし物くらうぬれあり  
 けこそ鯉くらうりこそ清おほくもまきおほる  
 不物さもさ及やんことあり紀う成ありるるみと雅  
 折る好きなきの赤の雅和草すかとの清湯あり  
 折る好きなきの赤の雅和草すかとの清湯あり  
 後う紀ことあり中様子家此所方のとゆの  
 上のくらも欄身厚れとえつるとか山入を實兼家の  
 清湯うしてあつても持ひて居るそとゆえとて  
 ありては物とありとそ案にそとゆえとて  
 めてらひり一事しとゆえとつとゆえとてありとてい  
 此ありは可いといふとゆえとてありとてい  
 こそあれとゆえとてありとてい

百十五

赤い海の舟をさしとゆえとてありとてい  
 舟はさしとゆえとてありとてい























海をこぼれをたかして有る海とよみよと  
 心教をさるる海とよみよと  
 千とよみよと  
 万とよみよと  
 海をこぼれをたかして有る海とよみよと  
 心教をさるる海とよみよと  
 千とよみよと  
 万とよみよと

海をこぼれ

百廿五  
 教回志人

人々若志め物なをさるる海とよみよと  
 子とよみよと  
 事し海をこぼれをたかして有る海とよみよと  
 心教をさるる海とよみよと  
 千とよみよと  
 万とよみよと  
 海をこぼれをたかして有る海とよみよと  
 心教をさるる海とよみよと  
 千とよみよと  
 万とよみよと

















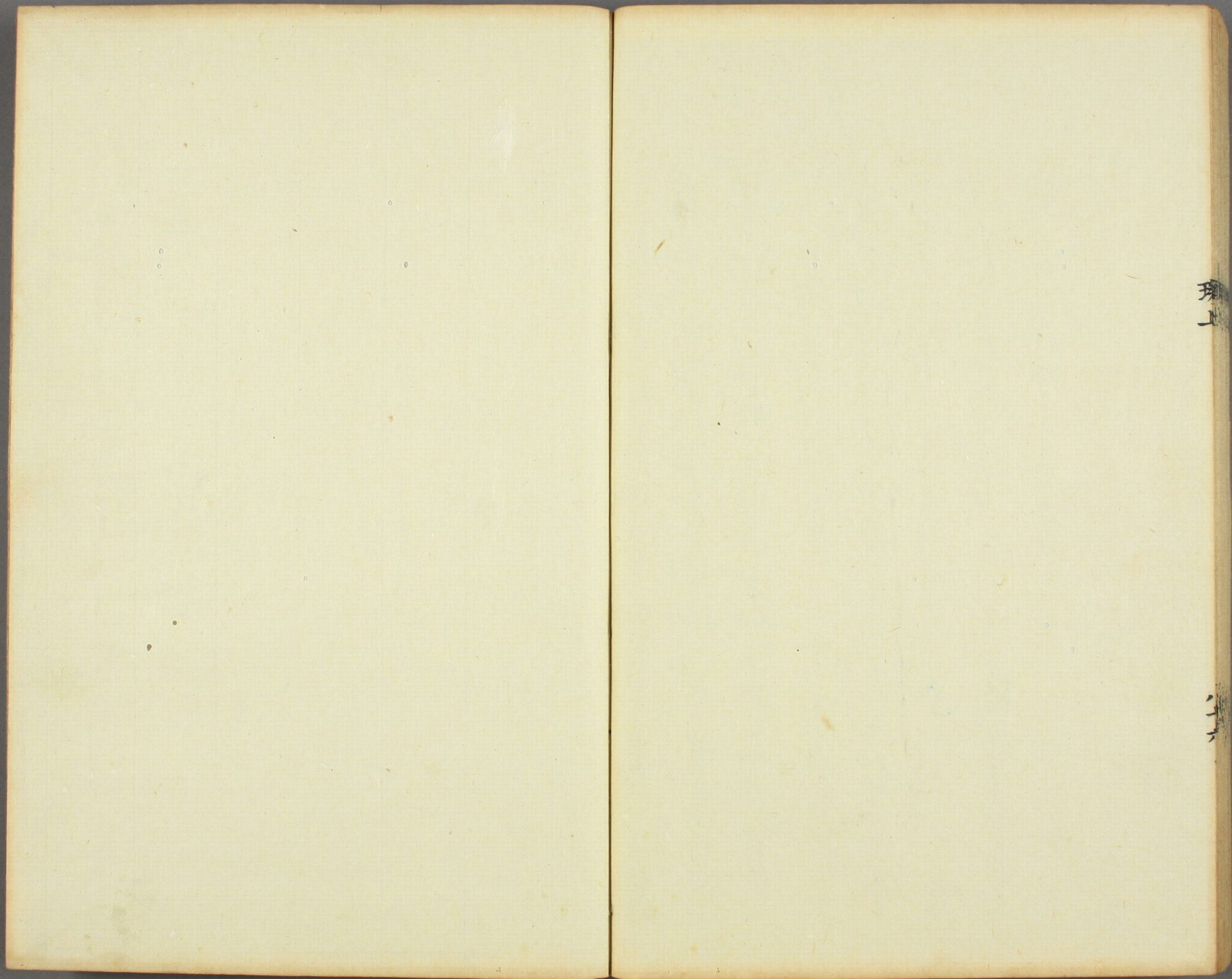












上

下



